

平成
28
年度版

警察職員による 被害者支援手記



警察庁
犯罪被害者支援室

発刊にあたって

犯罪被害者は、犯罪による直接的な被害だけでなく、その後に生じる様々な問題により精神的被害など多くの被害に苦しめられます。犯罪被害者が、こうした被害から回復し、再び平穏な生活を営めるようになるためには、様々な支援が必要です。

この冊子は、全国警察の第一線において、犯罪被害者の支援活動に当たる警察職員から寄せられた「手記」を、警察庁犯罪被害者支援室が取りまとめたものです。

ここに収めた手記には、犯罪被害者がどのような状況に置かれ、どのように苦しんでいるのかの一端が現れているほか、個々の犯罪被害者に真摯に向き合い、時には共に涙しながら、犯罪被害者の立場に立ってその様々なニーズに応えるべく努力している警察職員の姿が記されています。

この冊子が、犯罪被害の実情や犯罪被害者を支援することの重要性などについての理解の一助となることを願っております。

平成二十九年三月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 西川 直哉

目次

道 標

私の警察官としての原動力

立ち止まらないこと

「大丈夫」という言葉

光を求めて

（交通事故死亡事故遺族の支援に関わって）

命の評価

被害者支援の重要性を学んだこと

心の声を聞く

重傷事故被害者の両親から教わったこと

悔しかった思い

警察署勤務 巡査部長 女性 …… 2

警察署勤務 巡査長 男性 …… 5

警察署勤務 警部補 男性 …… 8

警察署勤務 巡査長 女性 …… 12

警察署勤務 警部補 男性 …… 16

警察署勤務 巡査部長 男性 …… 19

警察署勤務 警部補 男性 …… 22

警察署勤務 巡査部長 男性 …… 25

警察署勤務 警部補 男性 …… 28

警察署勤務 巡査長 女性 …… 31

※警察では、性犯罪、少年、悪質商法、暴力団、交通事故等に関する相談ついて、
全国統一の相談専用電話「＃（シャープ）九一一〇番」により受け付けています。

道 標

警察署勤務 巡査部長 女性

「遺族調書」を頼む。上司からの一声。当時、発生した死亡ひき逃げ事件の捜査に従事している中でのことだった。

死亡ひき逃げ事件は発生当時から被疑者を特定する手掛かりが少なく、捜査に要する時間も人員も膨大なものである。

被疑者が判明しても逮捕までの捜査、逮捕後の被疑者の供述等に対する裏付け捜査、検証など、捜査事項は山積みで事件終結までの道のりは長く、捜査員は一丸となりこの長い道のりを限られた時間の中で走り続ける。

私もこの道のりを走っている一員であった。

そんな中、上司からの任務分担の一声で、亡くなった被害者のことについて、被害者の家族から聞いた内容を供述調書として記録する作業、つまり遺族調書を担当することとなった。

私は交通課員としての勤務が長かったものの、遺族調書を作成したことがなかった。

初めての遺族調書を任せられ、私の頭の中は「捜査に必要なこと」をもれなく聴取する」ということだけに支配されていた。

私はベテランの交通捜査員に遺族調書に必要な聴

取事項を確認したのみで、遺族からの調書作成に臨んだ。

遺族調書作成開始後、前日の様子、当日の行動等、聴取事項を聞き進めていき、「予定時間より早く終わるな」と考えながら、被害者の生前の人柄を尋ねたときである。

それまで私の目を見て質問に迅速に答えていた遺族が突然うつむき、黙り込んだ。

私は何かと思い、その様子を黙って見ていると、遺族が握りしめていた「被害者の手引」と呼んでいる制度等が記されている冊子の上にポタポタと水滴が落ちた。

先ほど私が遺族に交付した冊子である。

私はハッと、「しまった」と思い、手を止めた。

私は警察官としていつも誰かの大切なもの、だれかの大切な人のために仕事をするように心がけていたはずなのに、このときは時間に追われる捜査の中で、遺族からの調書作成を「捜査に必要な書類作成という一つの作業」として臨んでいたことに気が付いた。

それまで矢継ぎ早に質問していく私に対して迅速に答えていた遺族は、気丈に振る舞っていただけだったのである。

遺族は肩を振るわせ、うわずった声で

「すみません、ちょっと待ってください。すぐにお答えしますから。忙しい中、時間取らせてし

「まいますよね。すみません。」
と言った。

私は少し考え、

「時間は気にしないでください。お話しするのが
つらければ、日を改めてもかまいません。」
と答えた。

それから約十分間、部屋の中には冊子に落ちる水
滴のポタポタという音と涙をすすり上げる声、こら
えきれず漏れる嗚咽だけが響いていた。

私はこの間、

「目の前にいる人は大切な人を不慮の事故で亡く
してしまい、これから、前を向いて歩いていく
ための道標をなくしてしまったのだ。警察官と
して、今この瞬間が大切な人を亡くした人のた
めに私ができる最大限の努力をすることが私の
仕事だ。今、この瞬間も単なる書類作成の時間
ではないんだ。私の行動、言動がこの人が今後
前を向いて歩いていけるほんの少しの道標とな
るかもしれない。遺族の気持ちにできる限り寄
り添っていきこう。」

と今までの考えを改めていた。

その後、真っ赤になった目をハンカチで押さえな
がら

「心優しい人でした……」

と口を開いた。

私は先ほどまでの自分を恥じながら、調書の作成

を再開した。

遺族調書を書き終え、私はおそるおそる

「これから捜査はまだ続きます。もし良けれ
ば今後、警察との調整窓口として私が担当した
いと思えますがよろしいでしょうか。」
と尋ねた。

遺族は私の予想とは裏腹に

「はい、よろしく願います。」
と答えた。

その後、遺族から確認する事項が発生するたび、
私は連絡を取った。

何度遺族の家に行っただろうか。

そのたび、仏前に飾られた被害者の遺影に手を合
わせ、心の中で現在の捜査の進捗を伝える。

立ち上る線香の煙の中で被害者の遺影がその都度
悲しんだり安堵したように見えたりした。

そのうち、私の家族の話等も聞きたいと言われ世
間話をするようになった。

お互いの仕事の話、家族の話、女性同士、洋服や
髪型の話……

少しずつ笑顔を見せる時間が増えてきた遺族に
「できることは少ないですが、何かあったら遠慮

なく連絡をください。」

と告げ玄関を出ることが繰り返された。

捜査も最終段階、遺族の家に被害者の衣服を返還
しに訪問したときである。

いつもの様に線香を上げ、心の中で「遅くなりましたが、御家族の元に衣類を返してきました。」

と謝罪する。
すると、遺族が

「コーヒーをいれるので、是非飲んでいってください。」

と言い、席を外し、台所へ向かった。

線香の香りが漂う居間で一人待つ。

そのとき、ペットであろうか、猫が一匹、床に広げた被害者の衣服に近づいて臭いを嗅いでいた。

私は思わず

「お帰りと言ってあげてね。」

とつぶやきながら頭をなでた。

台所から遺族がコーヒーを持ってきて私の前に座り、ぼつりと尋ねた。

「今回、なぜあなたが私たち遺族の担当になったのですか？」

私は、最初の遺族調査のときに、自分の気持ちで態度に出ており、それを非難されると思った。

私は覚悟を決め、

「実は、最初はたまたま私になっただけでした。

これまでの対応で、不満だった点を遠慮なくおっしゃってください。」

と答えた。

しかし、その答えは意外なものであった。

「最初から最後まで、あなたが担当してくれて本当に良かった。十分すぎるほど色々気を遣っていただきました。忙しいだろうに、たわいもないおしゃべりにつきあっていたいただいた時間が楽しかったです。主人を亡くし、話す人がいないということは、こんなにつらいことだと思いませんでしたが、あなたと話すだけで心が軽くなっていきました。正直、警察官には怖いイメージしかなかったのですが、あなたは家に来るたび、仏壇に線香を上げ、長い時間を合わせていました。先ほど、衣類に近づく猫に『お帰りと言っただけでね』と言ってくださいましたね。あなたにしてみれば他人のボロボロの洋服なのに、人として扱っていただいて感謝します。」

と答えたのだ。

私は意外な答えに驚くとともに胸が熱くなり「こちらこそ、こちらこそありがとうございます。」

と答えるだけで精一杯だった。

こんな未熟な私でも、遺族が前を向いて歩いていく道標を作る手伝いができたのかもしれないと感じた。

被害者支援に対応する警察官は、被害者遺族にとっては良くも悪くも全ての警察の代表となる。

自分の他に幾らでも優秀な警察官はいるが被害者遺族にとっては知るよしもない。

そんな中で、自分ができることは、何でもしてい

く。ただ話し相手になるだけで、被害者支援になることを知った。

被害者の気持ちに寄り添っていくことさえ忘れなければ、話を聞くだけでも立派な被害者支援となることを胸に自信と誠意を持って進んでいこうと思う。

私の警察官としての原動力

警察署勤務 巡査長 男性

私が、巡査を拝命して、早十年が過ぎ、そのほとんどの時間を地域課で勤務してきました。

地域課は、警察署の中で最も地域住民と接する機会が多い部署であり、警察の顔と呼ばれ、日夜、事件・事故を取り扱っています。日々発生する事件・事故に対し、私は被害者のために何ができたか、本当にそれが適切であったか、もつと適切な方法があったのではないかと自問自答を繰り返し、答えが見つからないまま日々の勤務に従事していました。

そんなある日、私が勤務する交番に一人の高齢男性が、自転車の盗難被害届を出しに来所されました。その男性は、私が数日前に受持ち区の巡回連絡を実施した際、訪ねた家の住人であることを思い出しました。

男性に対して巡回連絡のカードの記載を求めたところ、その男性は

「最近、警察官の不祥事が多いよな。あんなのこ
と信用できるんか。」

と言ってきたので、私も

「不祥事が発生していることは事実であり、恥ずべきことですが、私は精一杯自分の職務を頑張っています。私のことを信じてください。」

と答えると、男性は、「さっきは、あんなこと言って悪かったな。」
と言ってくれました。

男性は自転車の被害届を出された後、私に「信用してるから被害届を出しに来たんや。自転車を見つけてな。」

と言つて、帰っていかれました。

このことは、私の心の中では、いつもの取扱いであり、特別記憶に残るような事案ではありませんでした。

この被害届を受理して、一か月程過ぎ、日々発生する事件・事故の取扱いで、あの男性の自転車のことを忘れかけていた頃、人が倒れているとの一一〇番指令を受けたのです。

私が現場に到着すると、見覚えのある男性が倒れており、意識がなく重体だったので、すぐさま救急車の要請をしました。

救急車が到着するまでの間、私は無我夢中でこの男性の心臓マッサージを続けました。

救急車のサイレンが聞こえたとき、私は本当に安堵したことを今でも鮮明に覚えています。

私は、男性を救急隊員に引き継いだ後、交番に帰所する途中、見覚えのあるその男性が誰だったかと記憶を思い返すと、一か月くらい前に巡回連絡や自転車の盗難被害届で取り扱った男性であることを思い出したのです。

男性に巡回連絡カードも記載してもらっていたことから、私は、すぐさま緊急連絡先に電話しました。すると、男性の息子さんが出られ、驚いた様子でしたので、私は落ち着かせながら概要や搬送先の病院を伝えて電話を終えました。

私はこのとき、巡回連絡カードというものの重要性を再認識しました。

この事案から一週間くらいが過ぎ、交番に一人の中年男性が来所されました。

私は、いつものようにこの男性に対し、

「どうされましたか。」

と尋ねると、男性は、

「この前は、父がお世話になりました。処置が早かったようで、意識が回復しました。そのことを伝えるにきました。本当にありがとうございます。」

と言つて、しばらく話した後に戻っていかれました。

今までの取扱い事案の中で、何度か感謝される言葉を頂いたことはありませんが、私の中で一番印象に残る取扱い事案になりました。

同時に忘れかけていた初心と、警察官としてのやりがい強く感じる事ができました。

それから数か月が経ち、交番にあの高齢男性が来所されたのです。

私は、当然お礼に来られたものだと思いますが、その反対で、

「自転車はまだ見つかってないんか。自転車ないと不便なんや。」

と、私が想像していたことと真逆な言葉が発せられたのです。

私は一瞬、蛇に睨まれた蛙のような状態になってしまいました。深呼吸しながら、

「御無事でよかったです。前に息子さんも来られました。自転車も一刻も早く見つかるよう最善を尽くします。」

と答えると、男性は少し頬が緩み、

「信じてるで、お巡りさん。」

と言つて頭を下げられました。

このとき、私は初めてこの男性の顔を正面から見ることができた感じがしました。そして私は、男性と少し話をしました。

男性は、

「三年前に妻が他界し、一人で寂しく生活している。被害に遭った自転車は、生前妻が私の誕生日に買ってくれたものだから大切なんや。」

と、はにかみながら話してくれました。

私はこの話を聞いて、被害者である男性の気持ちをないがしろにして、自分は業務面を最優先に考えて仕事をしていたんだということを感じました。

同時に警察官の制服を着ている自分が恥ずかしくなりました。

私は、今まで被害者のために何ができるかという

ことを考えて勤務してきたつもりでしたが、結局のところ、被害者自身を見ようとせず、被害者の悲しみを置き去りにしていたかもしれないと痛感させられました。

この取扱いを機に私は、被害者の気持ちに少しでも寄り添うことができるように努めてきました。

街頭活動をする中で、絶対にあの男性の自転車を盗んだ被疑者を捕まえて、盗まれた自転車を発見してやろうという思いも強くなつていったことをよく覚えています。

しかし、気持ちとは裏腹に、一向に自転車盗被疑者を検挙することはかないませんでした。

何度かパトロールを通じて、男性宅に赴き、雑談を交えながら

「まだ自転車が見付かっていない。」

という連絡をすると、男性から

「いつもありがとう。」

と思いがけない言葉が返ってきました。

私は男性に、この「ありがとう」の真意を尋ねたところ男性は、

「自分の自転車のことを気にかけてもらって、何度か家に来てもらっているうちに、お巡りさんのおかげで、自転車を盗られた怒りが薄れていったからな。」

と照れながら話してくれました。

私は、被疑者を検挙して自転車を一日でも早く被

害者に返すことが、一番被害者のためになると確信していましたが、その他のことでも、被害者に安心感を与えることができるということを初めて体験しました。

それは、被害者の心情を思い、寄り添うこと、被害者と気持ちをつ一つにして、それを考えることだと思いました。

被害者支援は、警察の重要な業務であり、決して一部の担当者だけの業務ではなく、地域警察官にも必要な業務であると確信しています。

私は、この男性と知り合い、被害者の声にもっと耳を傾け、被害者の不安を知り、被害者のために仕事をしていかなければならないと強く感じました。

被害者支援を意識して事案を取り扱うことで、本当の意味での「被害者を支えるということ」を学べました。

この経験を生かして私は、これから被害者一人一人と正面から向き合って応対し、少しでも被害者の手助けとなるように、より一層努力していきたいと思えます。

立ち止まらないこと

警察署勤務 警部補 男性

前任者の退職により、署長から犯罪被害者支援係への配置換えを打診され、犯罪被害者支援係長として勤務することになりました。

犯罪被害者支援係があることは当然、知っていましたが、実際の活動内容は全く知らず、警察学校において十日間の教養を受けたことで、自己紹介から始まり、被害者や遺族からの相談への対応、事情聴取や実況見分等の付添い、自宅等への送迎、警察からお渡しする「被害者の手引」と呼んでいる冊子の補足説明、捜査活動の必要性の説明と犯罪被害給付金制度の概要説明、被害者への事件概要説明等々、警察が行う支援活動が沢山あり、その仕事の重要性を知るとともに、同時に自分のできるのかとの不安が募りました。

私は当時五十七歳で、これまでの警察人生のほとんどを生活安全部門で勤務し、主に少年係を担当して被害少年や保護者の心情を考えながら事件をまとめ、被疑者を検挙してきたつもりでしたが、実際に事件と切り離して被害者支援のみを担当してみると、これまでの被害者への支援は犯罪捜査を重視しすぎて不十分であり、被害者支援を十分やっていると考えていた自分の思い上がりだったことを痛感さ

せられました。

友人に殴られて傷害を負い、一時期意識不明となつて生死が危ぶまれた傷害被害者や家族への支援、死亡交通事故により夫を失つた新婚間もない妻への支援、帰宅途中の夜道で強姦被害に遭つた女性への支援等、日々起こる様々な事件、事故の被害者、遺族の方への支援をさせていただきましたが、被害者支援にノウハウはなく、苦しんでいる被害者等と向き合うたびに自分の無力さを感じさせられました。被害者等の気持ちに少しでも近づけるならと思ひ、犯罪被害者の遺族が書かれた手記を読ませさせていただきました。

その手記には「警察や自治体、特に司法関係者には、仕事ではなく、一人の人間として被害者の外見では見えない心の傷に目を向けてほしいと望んでいます。」との一文があり、警察官として、非常に寂しく、被害者の方に申し訳なさを感じるとともに、自分も通り一遍の対応になつていないだろうかと反省させられ、「自分だからできる、自分らしい被害者支援って何だろう。」と真剣に考えさせられました。何をすれば良いのかとの結論は出ませんでした。が、とにかく動くこと、支援というよりも暖かく寄り添わせていただくことを考えることにしました。このように日々悩みながら取り組む私に、死亡交通事故の被害者遺族の方から数多くのことを学ばせていただく転機がありました。

その事故は、被害者が仲間の作業員数名と大雨のため道路上に流出した土砂の撤去作業中、右カーブを走行してきた加害者の車両が対向車線にはみ出し、現場にいた作業員数名と衝突して、その結果、被害者を死亡させ、他の作業員に重軽傷を負わせた大事故でした。

加害者は、現行犯逮捕されましたが薬物の大量服用による前向き健忘を主張し、危険運転致死傷か過失運転致死傷かで争うこととなりました。

遺族には、事故の翌日の早朝に被害者の遺体と対面していただくことになり、そのときのショックを少しでも和らげたいと思ひ、納棺師の作業に立ち会いながら、その納棺師に対し、細々とした配慮をお願いして、二時間ほどかけて対面の準備をさせていただきました。

警察署に訪れた被害者の奥さんと娘さん、娘さんの婚約者は、いずれも憔悴しきつた顔をしており、最初、どのように声を掛けたら良いのかと考えましたが、私の名刺をお渡しして自己紹介し、事故の概要を説明させていただき、あらかじめ体に損傷のあることも説明させていただいた後に、遺体の安置場所に案内させていただきました。

遺族の方には、「眠つてゐたい。」と、安らかな顔に安堵していただくことができ、遺族が涙する後ろで、私も涙したのを忘れません。

その後は、遺体の引取りから、葬儀の準備と慌た

だしく進み、四十九日法要の日に事故現場に花を手向けに行くとの連絡を受けて付き添わせていただきましたが、そのときに、被害者の奥さんから事故当日、夫は、道路上に土砂が流出したことで、朝早くに会社からの連絡を受けて、現場の復旧のためにいつもより早い時間に出勤することとなり、いつもは玄関まで見送るのを、その日に限って、見送りができず、玄関から出て家の前を通り過ぎる姿を窓越しに見送り、それが元気な夫を見た最後となってしまい、しっかりと見送りできなかったのを悔やんでいることを泣きながら話してくれました。

また、娘さんからは、「父は、若い頃に色々な事業を興しましたが思うような成果が出ず、母と私の生活を支えるために土木作業員として働き、苦しい生活の中、私を大学に進学させ、海外への留学までさせてくれました。普段は無口でしたが、私の結婚式を間近に控え、私の夫となる人に、『娘を頼む。』と会うたびに口にし、母と共に結婚式の日を楽しみにし、家族の幸せを考えてくれた心の優しい人でした。」と生前の被害者について語ってくれました。交通事故により、幸せな日々を一瞬のうちに奪われた遺族から語られ、被害者の人物像が少し分かった。家族の無念さも知り、私からは、「今は緊張しているけれど、落ち着いてきた頃が心配です。心がむしばまれる方がいます。」と、心配事は一人で考えず、いつでも連絡をくれるようにと伝えたところ、第一

回目の公判後に娘さんから連絡があり、「裁判を傍聴した際に、母が大声を上げ、いつも冷静な母とは別人になり、病院では、父の死に起因するPTSDと診断された」と連絡を受けました。

私から奥さんには、定期的に連絡を取るようになっていたのですが、私からの電話を心待ちにしているとも聞かされ、頻繁に連絡する中で、電話を取り次ぐ娘さんが「お母さん、はぐれ刑事だよ。」と母親に伝えているのが聞こえたのです。私が何のことかと確認したところ、この親子の中では、テレビドラマの「はぐれ刑事純情派」に出てくる主役の藤田まことさんが演じる暖かい刑事役と私がダブり、私のことが「はぐれ刑事」で通じるようになったと教えられました。このときの私は、電話口で寄り添わせていた「心が通じた。」と感じた途端、目頭が熱くなっていました。

公判では傍聴する娘さんが、涙を流して鼻をすすっても大丈夫なようにティッシュを用意して手渡したり、いつ見られても目線で「大丈夫。」と応援できるようにしたりなどを心掛けました。

裁判は、危険運転致死傷か過失運転致死傷かで争いましたが、被害者側の主張が認められ、危険運転致死傷により、被告人に二年六月の実刑判決が言い渡されましたが、その後の民事裁判はまだ係争中であり、この遺族に本当の意味での安らぎは来ていません。

今の私にできることは、定期的な電話連絡だけとなつてしまいました。奥さんからは毎年クリスマスカードが届けられ、昨年は、奥さんが好きな曲である「ラストクリスマス」のメロディーが流れるカードが届けられました。そのカードには「いつも、お気遣いいただきありがとうございます。毎日を元気に過ごせるようにと思っております。」と文章がつづられていました。

娘さんからは、「この一年、大変お世話になりました。初めてお会いした日からずっと、細やかな心遣いと思いやりを支えていただいたこと家族みんな心から感謝しています。〇〇さんに担当してもらえなければ、もつともつと大変な日々だったと思います。ありがとうございます。」との内容であり、被害の一月後に自分が結婚した際の写真を同封してくださいました。この親子からのクリスマスカードと手紙は、写真と共に私の机の中にあり、被害者支援で迷ったときにいつも私を励ましてくれます。先日、警察が行う犯罪被害者支援について新聞記者から取材を受け、この遺族から頂いた手紙について「遺族の手紙」と題して報道され、警察が行う被害者等への支援が知れることとなりました。

何より嬉しかったことは、取材を担当した記者から新聞と共に届けられた封書に、私から「優しい記者になれ。」と言われたことを忘れません。」としたためられていたことです。この記者は、被害者支

援に対する良き理解者となり、きつと、自分が書く記事で、被害者の心情を傷付けることはないだろうと思えたことです。

このように、周りに、犯罪被害者支援を理解していただくことも、遠回りではありますが、犯罪被害者支援活動だと考えています。

警察が行う犯罪被害者支援活動は、被害者やその遺族に寄り添うことが重要ですが、皆様に犯罪被害者支援活動の必要性を知っていただくことも重要な役割であり、地域での講演、命の大切さを学ぶ教室の開催、募金活動等すべきことはたくさんあります。

私は、来春で退職を迎えますが、この警察にしっかりと犯罪被害者支援の土台作りをし、次世代に犯罪被害者支援を伝えたいと思いい、走り続けています。

最後に、私事になりますが、この遺族の支援を始めた当初、毎日のように被害者が夢に現れました。最初に遺体を見たときの印象が強く、遺族のつらさを知ること、代理受傷の前兆に陥りました。

毎日のように夢で飛び起きるたびに、隣で寝ている妻にも心配を掛け、頂いた手紙に「良かったね。分かってくれたね。」と、涙を浮かべて喜んでくれたのは妻でした。

妻という応援者、理解者に支えられ今の私があります。

私を支えられたときのことを忘れず、今後も、支援と堅く考えるのではなく、支える活動として相手

を思いやることを優先し、大事な身内を亡くされた遺族が「会いたい。」との気持ちをもち続けていることを忘れず、「負担にならないこと。」を念頭に、「立ち止まらず」、「深く沈んでいる被害者等の心に寄り添わせていただきたいと思えます。

「大丈夫」という言葉

警察署勤務 巡査長 女性

私たちが事件を捜査するとき、その目的は、真相を明らかにし、事件を解決すること。そのためには、被害者や関係者の協力は不可欠で、できるだけ早く協力を求めようとする。

一方、被害者にとって捜査に協力するということは、「被害」つまり「恐怖」を思い出すということ。当時の私は、前者と後者との違いを曖昧に考えていた。そんな私に、捜査への協力を被害者に求めることが、被害者を傷つけてしまうことでもあると、教えてくれた事件があった。

それは、とある冬の日のこと。

私は男性の上司と後輩と三人で、いつものように交番で勤務をしていた。

夕刻、日が落ち、辺りがすっかり暗くなった頃、警らから戻った私が書類をまとめてみると、ふと交番のドアが開いた。音に気付いて顔を上げると、一人の女性が私の前に立った。

何事だろう。立ち上がると同時に、その女性に声をかける。

「どうしましたか。」

女性は、やり場のない怒りをぶつけるように答えた。

「この子が盗撮にあったんです。」

女性の後ろをよく見ると、小さな少女が隠れていた。年頃は、小学校の中学年くらいだろうか。少女は、私の視線に気付くと小さく頭を下げた。一緒に来た女性は、この少女の母親だと言う。

「盗撮」。この言葉を聞き、私はハッとした。被害者は少女。今、ここにいる女性警察官は私しかない。私の出番だ。

私は上司と後輩に目で合図をした。「私が、少女から話を聞きます。」と。二人は私の合図に気付き、上司は母親への事情聴取、後輩は署へ速報し、現場に行く準備に取り掛かる。

そして私は、自分の役目を果たすべく、少女と視線を合わせた。

「何があったのか、教えてくれるかな。」

少女はゆっくりと母親の後ろからこちらにやってきた。一度だけ母親の顔を見た後、伏し目がちに答えた。

「塾に行っていたの。」

その子の通う塾は、交番のすぐ近くのビルの中にあつた。少女は淡々と話を続ける。

「途中でトイレに行ったの。塾の外にあるんだけど。トイレに入って上を見たら、ケータイがこっちに向いていたの。」

同じビルの中にある共用トイレの個室に入って便座に座り、ふと上を向くと、隣の個室との仕切りの上から、携帯電話のカメラが自分に向けられている

のが見えたのだそう。驚いた少女は慌ててトイレを飛び出し、塾に駆け込んだ。そして家に帰ってから母親に事件のことを伝え、そのまま母親に連れられ交番にやってきたのだと言う。

少女の話を聞き、私の頭に浮かんだ言葉は「許せない。」の一言。同じ女性として、「盗撮」というまさに「女の敵」ともいえる犯罪への嫌悪感からか、いつも以上に気合が入る。卑劣な行為をする犯人を野放しにしてなるものか。何としても犯人を捕まえ、早く事件を解決したい。この少女を、早く安心させてあげたい。

すぐに現場を確認しに行かなければ。

一旦少女を待たせ、私は上司と後輩の元へ向かった。二人に、少女から聴いた状況を説明する。そして現場に向かう準備を整え、少女の元に戻る。

「案内してくれるかな。」

私の問いかけに、少女は先ほどと変わらず静かにうなずいた。

「大丈夫。」

少女のその言葉に安心した私は、少女と母親を連れて現場のトイレに向かった。トイレは少女の通う塾と同じビルの中にあり、外部の人間でも利用できるものだった。

私は少女をトイレの外で待たせ、中を確認する。人気が感じない。

トイレ内に誰もいないことを確認すると、私は少

女の元へ戻った。「無理だったら、いいからね。」と前置きしてから少女に、

「トイレの中に来てほしい。そのときのことを、思い出して教えてほしい。」

私は少女に、犯人を捜すために、犯人がどこにいて、どのように盗撮をしたのか、その状況を詳しく知りたいのだと説明した。

このとき、私は「早く事件を解決しよう」と気が急いでいた。そして、これまでの少女の落ち着いた様子を見て、安心してしまっていた。この少女が事件について淡々と答え、現場に来て困惑したり慌てたりすることなく、平然としていたからだ。

「きっとこの子だったら大丈夫だろう。」と、安易に考えてしまっていた。

期待どおりと言うべきなのか、少女はこのときも「大丈夫。」と答えた。

トイレ内に入り、自分がどのように座り、犯人の携帯がどのように見えたのか、指を指しながら事細かく説明してくれた。

「やはりこの子は強い。」

私はそんなことを頭で考えながら、少女に背を向け、再びトイレ内をよく確認した。少女からの情報をもとに被害状況を頭の中で再現する。

しかし、ここでふと違和感に気付いた。

どうして、この少女はこんなにも落ち着いている

のか。

被害に遭った場所に、戻りたいと思う人はいないだろう。私は犯罪被害に遭った女性をたくさん見てきたが、現場に行くことを恐れ、泣き、取り乱す人も少なくはなかった。恐怖を思い出す場所にいて、なぜこの少女は平気なのか。

嫌な予感がした。私はゆっくりと振り返り、もう一度少女をよく見た。

少女は、トイレの入り口で、静かに立っていた。何も言わず、いや、何も言わないように、ぐっと唇を噛んでいた。

そして少女の小さな手は、震えを止めるように、また、何かに耐えるように、真っ白になるほど強く強く握り締められていた。

何という思い違いをしていたのだろう。

少女の落ち着いた様子は、感情を懸命に抑えていたものだ。彼女が繰り返し返していた「大丈夫」は、決して「平気」という意味ではない。「大丈夫、まだ我慢できる。」という意味であったのだ。

捜査をしたい。犯人を捕まえた。自分のその気持を優先し、私は少女の気持ち置き去りにしてしまった。犯罪により傷つけられた少女に、更に苦しみを与えてしまっていたのだ。その事実に気づき、締め付けられるような鈍い痛みが、胸に走った。

少女になんと声を掛けたいのか、分からない。言葉が出てこない。

けれど、少女がこんなにも頑張つて、苦しみに耐えてくれていたのだ。その気持ちに応えたい。

私は少女の元に駆け寄った。

そして両手で、その真つ白になった少女の手を、上からそつと握つた。少女が驚いた顔をした。

「ありがとう。」

私は少女に伝えた。

「たくさん我慢させてごめんなさい。頑張つてくれてありがとう。」

私は、そのとき初めて少女の目を真つすぐに見たように思う。少女の目には一瞬の驚きが浮かび、そして少しだけ緊張がほぐれたのか、じんわりと涙が浮かんでいった。

被害者支援。その言葉が「被害者を助けること」を意味するのなら、被害者支援は必ずしも事件を解決することではないのだ。捜査に協力する、つまり再び恐怖を思い出すことを求められる被害者の「勇氣」になること。捜査の過程、そして事件解決後に、再び傷つき苦しむおそれのある被害者の心の支えとなり、心に寄り添い、味方だと思える存在になること。被害者の心を軽くすることが、被害者支援の一つなのだ。

そのためには、被害者の「本当の言葉」、つまり言葉として出てこない「心の声」を、その表情、仕草の一つ一つから読み取る力が必要なのだと、そう気付かされた。

事件は、その後の捜査で犯人が判明し、無事解決した。しかし、私は少女の苦しみに気付かなかつた罪悪感からか自ら少女に会いに行くことはなかつた。

そして季節は流れ、暖かな春を迎えた。

私は変わらず地域警察官として交番勤務をしていた。暖かい日差しの中、徒歩で警らをしていると、反対側の歩道に見覚えのある顔を見かけた。あのときの少女だった。

少女は私に気付くとこちらに走ってきた。軽く挨拶をする。少し髪が伸びただろうか。元気そうで安心した。少女は、

「ねえ、警察のお姉さん、私ね……」
と私に声をかけた。

そして続けた。

「大丈夫だよ。」

あのとときは違う、年頃らしい表情豊かな明るい表情。笑顔で向けられた大丈夫という言葉に、私はふつと心が軽くなった。

少女が私に気付かせてくれた、被害者支援の意味。私はこの先、様々な事件に直面するだろう。そのときは、少女が気付かせてくれたことを思い出し、被害者の「本当の言葉」を聴き、彼らの心の支えとなりたいと思う。

光を求めて

（交通死亡事故遺族の支援に関わって）

警察署勤務 警部補 男性

「担当さんには、私たちの本当の苦しみは分からないんですよ。」この言葉を何回聞いたであろう。そのたびに私はただ黙って、相手の話を聞くしかなかった。

それは、もうすぐお盆を迎える夏の暑い日に突然やってきた。管内の商業施設駐車場で起きた交通事故。被害者は三歳になって間もない幼女であった。その日、女の子は、母親と妹、曾祖父の四人で、いつも買物に来ている自宅近くの商業施設にいつもの変わらないように買物に来ていた。ところが買物を終え、駐車場に止めてあった母親の車に向かう途中、同じく買物に来ていた女性運転の車の右前タイヤに巻き込まれてしまった。

その事故の一報を無線指令で聞いた私は、署長に同行し、現場に向かった。現場では加害者の女性が力なくうなだれ、警察官の話の聞いている。被害者の幼女は既に救急車により病院に搬送され、現場には目の前でひ孫が車に巻き込まれる様子を目撃した曾祖父が呆然とたたずみ、女の子の麦わら帽子が落ちていた。

私は、一旦署に戻り、署長の指示を受け、被害者

支援活動のため、女の子が収容された病院に向かうこととなった。病院までの車中、「何とか無事であってほしい。」とだけを願う車を走らせた。病院に着くと、女の子は救急処置室で治療中であつた。待合室で家族に対面した。父親も母親も若かつた。聞くに母親は私の子供と同じ歳、父親に抱きかかえられ話ができる状態ではなかつた。ただ、「私が……私……」とだけ言っているのが聞こえた。多分「私がちゃんと娘を見ていれば、事故に遭わずに」と自分を責めていたのだろう。私は自己紹介をしたものの、その後はただ両親のそばにじっと座っていることしかできなかった。

女の子が病院に搬送されて二時間後、懸命な治療のいかにもなく死亡が確認された。たった三年の彼女の人生、一瞬にして奪ってしまふ交通事故の怖さを目の当たりにした瞬間だった。それと同時にこれから先、ここに残された若い両親がどういう人生になつていくのだろうかという、何とも言えない不安感に私自身が包まれた。

翌日、遺族と連絡をとり、自宅にて面会した。自宅では既に祭壇が置かれ、小さい棺の中にまだあどけない顔の女の子が静かに横たわっていた。遺族には改めて自己紹介を行い、被害者支援を行つていくことを伝えた。父親からは、早速、報道に関することや相手の処分に関することが質問されたが、即答は避けた。何よりも加害者に対する憎しみ、その憎

しみの矛先が警察に向けられている感じがした。

女の子の通夜、葬儀が淡々と終わっていった。心配された報道等とのトラブルや関係者等のトラブルもなかった。しかし、通夜に同席した私に父親からシヨッキングな事実が知らされた。

「どうも、私たちのことがネットに書き込まれているみたいなんです。」

「母親が付いていて、なぜ手を引いていなかったのか。ひいてしまった方が気の毒だ。」

などと、被害者であるはずの自分たちが悪いかのようにならされているという。そして父親はこう続けた。

「なぜ、私たちが、こんな目に遭わなければいけないんでしょか。娘は何をしたっていうんでしょか。」

妻は、まだネットの書き込みのことは知りません。早く削除するなどの対処をしてください。」

私は、その書き込みを確認した。確かに両親、とりわけ母親に対する誹謗中傷が百以上も書き込まれていた。この人たちはどういう気持ちで書き込みをしたのだろうか。善意のつもりだろうか。いや悪意に満ちている。失意のどん底にある両親を更に苦しめる行為を許せなかった。私は、関係部署に要請し、書き込みの削除依頼を行った。その結果、完全にはいかなかったが、大半の書き込みは削除された。そして、誹謗中傷が母親の目に触れることだけは食い止めた。

時間がたつにつれ、父親の言動は、娘を突然失った悲しみから、娘を死に追いやった加害者への恨み節へと変わっていった。そうすることで娘を失った悲しみから少しも遠ざかりたいという気持ちが伝わった。しかし、そういう言葉は直接加害者に向けられることはなく、全てが私へと向かってきた。

「なぜ、相手はのうのうと今も生活をしているんでしょか。」

「自分は時々、相手の家まで行って、相手を殺してしまいたくなる衝動にかられるんです。」

「私は一生相手を許せないと思います。なぜ娘は死ななければいけないかったですか。教えてください。」

これらの言葉を何回も何回も私は聞かされた。時には夜中に泣きながら私の携帯電話にかかってくることもあった。「今から行くか？」と言つても、

「いいえ、いいんです。今は外で妻もいませんから。すみません、分かっているんです。自分が強くならなければ、妻や下の娘のためにも強くならなければいけないんです。でも、時々ものすごく不安になるんです。聞いてくれる人がいなくて、担当さんに電話をしてしまつてすみません。」

と言つて、ただ私は父親のすすり泣く声と、悲痛な心の声を聞くだけだった。「大丈夫、泣きたいだけ泣けばいい。かわいい娘を失う気持ちはすぐくつらいでしょうね。」と声を掛ける。しかし父親は、そ

のたびに、

「何が分かるんですか。あなたには私たちの本当の苦しみは分からないですよ。」

との言葉が返ってくる。私は何も言えない。それでも、父親は、私に電話をかけてくる。私は次第に、「何も言わなくていいんだ。ただ聞いてあげてるだけでもいい。」と思うようになった。

交通事故が発生してからもうすぐ一年になろうとしている。父親からの電話も三月を最後にない。最後の電話でのやり取りで、

「だいぶ気持ちも生活も落ち着きましたが、それでも娘のことは忘れることはできません。そのたびに悲しい気持ちになります。一つだけ教えてください。娘が亡くなったことで、私たちの手元にまとまったお金が入る予定です。私たちはそのお金をどうしたらよいものか迷っています。使うのは娘に対して悪いような気がして……どうしたらいいでしょうか。」

すぐ素直な気持ちだろう。私は、「それは、娘さんが生きていて、高校や大学に進学したり、結婚したりするときに当然親として用意してあげるべきお金を、先にもらったと考えたらどうでしょうか。そう考えれば、どう使えばいいかおのずと分かるんじゃないですか。」と答えた。

父親は、

「そうですね。それでいいですよね。娘を忘れず、

娘のために使います。使つていいですよね。なんとなくですが、ようやく光が見えてきました。」と答えた。この言葉を聞いたとき、幾らかなりとも被害者遺族のためになったかと思うと同時に、何よりも、このような相談までしてもらうような信頼関係を築けたのかと嬉しく感じた。

女の子の命日にはお参りに行こうかなと思つている。そのとき、両親から遺族から、少しでも前向きな、そして光に向かつて進んでいる話が聞ければ、私自身が、前向きな気持ちで今後の被害者支援活動に励んでいけるのではないかと思つている。

命の評価

警察署勤務 巡査部長 男性

みなさんは、交通事故に遭ったこと、起こしてしまっただけかあるでしょうか。交通事故には、ほとんどの場合、被害者と加害者がいます。被害者と加害者の区別がはっきりとしている事故もあれば、どちらともつかない事故もあります。世間は、過失割合に高い方を非難し、低い方に同情する傾向にあるようです。これからお話しするのは、ある非行少年の死亡事故についてです。

それは、小雨の降る、ある深夜の一一〇番通報から始まりました。二トントラックが交差点を右折する際、直進してきたバイクと衝突する交通事故が発生したのです。

その日、宿直だった私が現場に急行すると、メチャクチャに壊れているバイクのすぐ横で、既に救急隊が、倒れている少年の心臓マッサージをしているところでしたが、その少年の腹部は損傷が激しく、素人目に見ても、一見して心肺停止状態でした。それを見た私は「とうとう起きてしまった。」と思いませんでした。なぜならその頃、管内では、二か月ほど前に「交通死亡事故一年間0件達成」の目標を達成し、地域住民の安全意識の更なる高まりに期待していたからです。

少年は、すぐに救急車で病院に搬送されましたが、残念ながら、命は助かりませんでした。所持品により身元確認をすると、事故現場から一キロメートルも離れていないアパートに住んでいる、十九歳の少年Aであることが判明しました。彼は、地元では、昔から有名な素行不良少年で、過去には、多くの交通違反もあり、私も、何度も彼の悪質な交通違反を目撃していました。日頃から地域住民は、その少年の交通違反や、非行行為に関する苦情を多く寄せており、「アイツさえいなければ、ここは平和なのに」と言う人さえいる有様でした。

私は、少年Aの自宅に電話をすると、母親が電話に出ました。私は、「A君が交通事故に遭って、病院に運ばれましたので、すぐに向かっていただけですか。」と連絡すると、眠そうな声で、「Aのケガは、軽いんですか。」と質問されましたが、私は答えることができず、既に、少年Aが死亡しているという事実は確認済みでしたが、電話で伝えるには余りにも重い事実でしたので、「ケガは軽くはないようですので、急いで病院に行ってください。」としか伝えることができませんでした。

そして、少年Aの母親は、明け方の病院で、変わり果てた姿の息子と対面し、悲しい事実を知ることになったのです。

朝、少年Aの母親を病院へ迎えに行き、警察署で、今回の事故の内容と、相手の男を現行犯逮捕したこ

とを説明しました。説明中、彼女は、ただ淡々と聞くだけで、質問をすることもありませんでしたが、私は、彼女の心のケアが必要と判断し、被害者支援制度により、継続して支援していくことを伝え、自宅アパートまで送り届けました。アパートの玄関を開けた彼女は、そこではらく立ち止まった後、「一人になっちゃった。」と小さく眩きながら、部屋に入っていききました。

警察署管内は、小さな町であり、少年Aは、有名な非行少年でもあることから、死亡事故の事実はたちまち町中に広がりました。警察署には、「やつと町が静かになる。」「どうせAが悪い事故なんですよ。」等という電話が多く寄せられました。

後日、警察署で、母親に対し、被害者支援制度の小冊子を渡した上、捜査状況の説明と同時に、近況の生活について尋ねると「生活は一変してしまいました。」と、小さな声で身の上を話し始めました。話によると彼女は、少年Aが五歳のときに、家庭内暴力を振るう夫と離婚し、それから、少年Aと六畳一部屋のアパートに二人で暮らしてきました。家は貧しく、少年Aは、小学校時代、貧乏を理由に、いじめられて泣いて帰宅することが多かったそうです。中学生になった頃から、けんかや恐喝、万引きを繰り返すようになり、高校に進学すると、一年生の夏休みを過ぎたあたりから不登校になり、退学してしまつたのです。その後、仕事に就き、働き始め

てしばらくすると、母親に「俺が家賃払うから、もつと広い部屋に住もうよ。」と言って、近所の、現在住んでいる2LDKのアパートを探してきて、去年引っ越したばかりだということでした。母親は、「このときは、本当に嬉しかったです。」と言って、そのとき、初めて笑顔を見せてくれました。

私は、「最近、お困りのことはありませんか。」と尋ねると、少し困った顔をして、「私の収入では、今のアパートには住めませんので、引っ越しをしなければなりません。」といい、「それと、近所の方から掛けられる言葉が、ちよつとひどいんですね。」と笑いながら言いました。その内容は、近所の人と顔を合わすと、一旦は同情するようなそぶりをしながらも、「けど、よかつたね、相手をケガさせなくて。」と、心ない言葉を掛けられているとのことでした。それも、近所の多くの人からだということでした。母親は、その内容を冗談めかして説明していました。私がふと席を立ったときに、机の下にある彼女の手思わず目が釘付けになりました。先ほど渡した小冊子を、両手でくしゃくしゃに握りつぶし、さらには、固く握ったその手が、小刻みに震えていたのです。彼女は、心では泣いていたのです。

再び席に着いた私は、「今後、お話ししたいことがあれば、何でも聞かせてください。私にできることがあれば、何でも力になりますから。」と伝えました。そして、私が母親を自宅アパートに送った

後、車に乗ろうとしたときに、初老の男性が私に近づいてきました。そして、「あなた、警察でしょ。

あんな悪ガキがいなくなつて、ちよつとは、この辺も良くなるといいよね。」と言つてきたのです。私は、腹の底から怒りが込み上げてきましたが、表情は変えずに、「そうですね。けど、お母さんは、やっぱり悲しいですよね。」と言いました。その男性は、納得のいかない表情をしていました。

その後、母親は、別の土地に引越していきました。事故捜査の結果、この事故の直前、少年Aの運転するバイクが、制限速度時速四十キロメートルの道路を、ほぼ二倍の時速約八十キロメートルで進行していたことが判明しました。トラックの運転手は不起訴となり、少年Aの母親に支払われた保険金は、過失割合の結果、想定よりかなり下回ることになりました。

少年Aの母親は、たった一人の家族を失つた上、経済的に困窮し、さらには、知らない土地に移ることにになりました。

新聞やテレビでは、「パトカーに追跡され、電柱に激突し死亡」「バイクを飲酒運転し、単独で転倒して死亡」等のニュースが頻繁に報道されています。インターネットの書き込みなどでは、このような事故の当事者については、同情されることは、まずありません。しかし、「被害者」とは、当事者だけに当てはまる言葉ではないのです。

被害者支援とは、行政機関だけが行うものでもありません。

みなさんの周りに、密かに、一人で苦しんでいる方はいませんか？是非、話を聞いてあげてください。そして、非難をしないでください。あなたの人生は、これまで完璧だったのかもしれないませんが、大抵の人は、完璧ではありません。あなたが完璧でないのなら、自分以外の人の苦しみは、分かるはずです。

ちよつと困っている人を見つけたら、力を貸してあげるだけでもいいのです。その習慣が、やがて大きな支援を生み出すのです。

被害者支援の重要性を学んだこと

警察署勤務 警部補 男性

私が初めて性犯罪事件を取り扱ったのは、刑事一年目の平成九年秋のことであり、当時、一緒に仕事をしていた主任が被害者に行った支援活動を見て、被害者支援の重要性を学びました。

その当時、地下鉄サリン事件等の凶悪事件を受けて、被害者支援の重要性が叫ばれてきたころでしたが、私を含め個々の警察官には、被害者支援という言葉が、どこか他人事のような馴染みの薄い言葉であったことは事実でした。そのため、被害者支援の重要性等について理解しないまま、私と主任の男性警察官だけで性犯罪事件を担当することになったのです。

事件は、二十歳代前半の女性が休日を利用して、昼間、車に乗って集合スパーに買物に行ったときに発生しました。スパーの駐車場に車を止め、買物を終えて車に戻ろうとしたところ、男に刃物を突きつけられ、むりやり男の車の後部席に乗せられ、手足を縛られた上、性的被害を受けたという卑劣な事件でした。

私が新米刑事であったことから、主に主任が女性からの事情聴取を行いました。私の頭の中には被害者支援などという言葉は全くなく、犯人さえ検挙すれば女性が喜んでくれるとしか考えず、犯人を早

く検挙したいという気持ちで一杯でした。

しかし、私の気持ちとは裏腹に、女性は被害状況について多くを語ろうとはしませんでした。

主任は、女性とコミュニケーションを図ろうと、優しい口調で「もう大丈夫だから。」と何度も何度も女性に言い聞かせたのですが、女性は「犯人に職場の連絡先を知られたかもしれない。」などと言って怯え、なかなか犯行の状況や犯人に関する情報を語ろうとしませんでした。

その様子から、女性は当時の恐怖がトラウマとなり、同じ犯人から再び襲われるのではないかという恐怖心から、被害の状況や犯人についてなど思いついたくないというように見えました。

私は、そんな女性に、どうすれば詳しい状況や犯人に関する情報を思い出し語ってくれるのだろうかという悩み、このままでは、いつまで経っても犯人を検挙することができないのではないかと歯がゆさを感じていました。その上、女性は泣きながら「試験が近いのです。アパートに一人でいると犯人が来るかもしれないと思います、怖くて勉強が手につきません。被害に遭った上、試験まで落ちるなんて悔しい。」等と訴えてきました。

女性は、午前中勤務し、その後は自分で試験合格に向けて自主的に勉強しており、その試験の日程が近付いているようで、女性の表情から犯人に対する恐怖心、被害に遭ったというつらい思いを抱え、

それが原因で勉強が手につかない様子でした。

私は、その訴えに応えてあげたいという気持ちはありませんが、女性の立場に立って考えることができず、心の中では、それどころじゃない、犯人のことをもうちょっと思い出してほしいなどと思っていました。そんな私でしたから、どこか安心して勉強する場所がないかという被害者の願いに心から考えることもできず、良い場所が見付からずにいきました。しかし主任は、そんな女性の訴えに対し「警察署で勉強すればいい。」と言ったのです。

現在は、来庁者に顔を合わせることもない、ベッドやシャワールーム、トイレを設置した被害者用事情聴取室が警察署内に設置されているためあらゆる要望にできる限り応えることができますが、当時は、そのような施設はなく、私自身、新米刑事だったことで、一般の人に勉強させるため警察署を利用していいのかわかるとしてしまいました。

女性は思ってもいなかった回答だったのか、少し間を空けて「いいんですか。」と答え、それに主任が「警察署なら絶対に犯人は来ないし、安心して勉強できるだろう。」と言っていました。すると、女性は「私、絶対試験に落ちたくない。」などと言いながら、「お願いします。」と力強く答えていました。

女性は、翌日から警察署で勉強することとなり、私は主任に言われるがまま、会議室に机と椅子を用意し、主任と私は女性が仕事を終えた午後三時ころ

に女性の仕事先に行き、女性を捜査車両に乗せて警察署まで連れて来て勉強してもらい、午後九時ころに署を出発して仕事先まで送り届けるという支援が始まったのです。

私は、一日でも早く犯人を検挙したいのに、こんな面倒なことをやっているのは、捜査が進まないと思いつながらも、主任に言われるがまま、非番の日も休みの日も関係なく、毎日、女性を迎えに行き、警察署で勉強してもらい、終われば送り届けることを数週間続けたのです。

すると、女性は徐々に私たちに打ち解けてきて、私たちに対して心を開きだし、一日でも早く忘れたかと思っている犯人について、懸命に思い出してくれるようになり、時には女性から「似ている人がいる」などと連絡をくれるようになりました。私は、女性が私たちに信頼感を抱いていることを実感できるようになり、その結果、犯人像が浮かび上がるなど捜査が進展していきました。

そんな矢先、女性から「職場に犯人から電話が来た」旨の連絡を受けたことで、女性に対して、身の安全を絶対を守ることを条件に犯人との接触を試みるようになりました。私は、あれだけ女性が怖がっていたのだから無理ではないかと思いつつ、主任と共に説得すると、女性は、私たちを信頼してくれていたことで、あれほど怖がっていた犯人との接触を承諾してくれたのです。そのときに私は、被害者と

信頼関係を築く重要性を深く認識しました。

後日、主任が女性の安全確保のため女性の車両の後部に毛布を被って隠れ、何台もの捜査車両が直近で警戒にあたりましたが、残念ながらこのときに犯人が現れることはありませんでした。

しかし、この数日後、犯人が別の女性を襲い隣接警察署に検挙されたという連絡が入りました。私は自分の手で犯人を検挙できなかった悔しさがあつても、女性が犯人の検挙を知れば喜び安心してくれるだろうと思い、早速、女性に犯人が検挙された旨を伝えました。そのとき、女性は安心した様子ではありましたが、どこかスツキリしない表情を浮かべていたことから、私は「犯人が捕まったのに、なぜなのだろう。」と思っていました。

そんなことを思いながら数日した頃、突然、女性が来署し、私たちに「試験に受かりました。ありがとうございます。」と礼を言いながら屈託のない明るい表情を見せてくれたのです。

私は、このときの表情を見て、女性が犯人を捕まえてほしいという気持ちがあつたのはもちろんのことですが、その先には、幼い頃から夢であつた職業に一日でも早く就きたいと頑張ってきたものが、今回の事件により遠ざかってしまうかもしれないという不安や悔しさをやりきれない思いを抱いていたことに気付かされたのです。

私は、この事件が初めての性犯罪被害者への支援

経験だったことから、今でも強く心に残っており、捜査を通じて、被害者との信頼関係の構築に努め捜査を進めなければ、犯人検挙に近付けないことはもちろんのこと、被害者が精神的に立ち直ってこそ、本当の事件解決になることを教えられた気がしました。

それと当時を振り返ると、主任には娘がおり、恐らく主任は「被害に遭つたのが、自分の娘だったら」などと思ひ、女性のことを支えてあげたい気持ちがあつたのだろうと思います。なぜなら、私も今は娘を持つ身であり、もし娘が被害に遭つたら等と考えることがあるからです。

そのような考えを持つようになり、私は、性犯罪被害者を含め各種被害者と接するとき、「自分の家族だったら」と考え、また「あのときの主任のように被害者を支えてあげられてるだろうか」と当時を思い浮かべながら接しているのです。

被害者支援は、現在では警察の他、色々な団体の体制も整備され、それに伴い、捜査もしやすくなつてきているものと思いますが、私は、初めて経験し学んだこの事例を教訓に、今後も被害者と寄り添う気持ちをお大切にして、早期に犯人の検挙に向け頑張っていることを思っています。

心の声を聞く

警察署勤務 巡査部長 男性

少年の母親は、私の目を見つめるとゆっくりと口を開き、息子が死んだのは自分のせいであると自分を責め立て、話し続けた。

程なくして、険しかった表情が和らぎ、

黙って私の話を聞いてくれてありがとう。
と私に言った。

私が某警察署で交通課事故捜査係員として勤務していた頃の話である。

日曜日の当直勤務、午前八時三十分には非番の交通課員と任務交代をして勤務に就いた。

係員として駆け出しで、捜査全般に自信のなかった私は、交通事故に関する一〇番指令や電話が鳴らないことを祈っていた。

暦の上では秋を迎えているのに、午前中から茹だるような暑さで、立っているだけでも体から汗が染み出していた。

午前中は交通事故の発生がなく、明日の任務交代まで平穏であれと思った瞬間、事務室内に一〇番指令を知らせるブザーが鳴り響いた。

無線に耳を傾けると、横断歩道を横断中の少年が乗用車に衝突され、被害に遭った少年の意識がないという交通人身事故の指令であった。

指令の内容から重傷事故であることが想像され、焦る気持ちを落ち着かせながら係長と共に現場に急行した。

現場へ到着すると、フロントガラスが蜘蛛の巣状に破損した乗用車が道路中央付近に止まっており、既に到着していた同僚から被害に遭った少年は心肺停止のまま救急車で病院へ搬送されたとの報告を受けた。

現場は、交通整理や聞き込みのために行き交う警察官、増え続ける野次馬、渋滞で停止している車両からの罵声やクラクション、破損した車両、横断歩道の上のシューズ等、経験の浅い私でも重大事故と理解できるような状況で、現場の雰囲気や緊張感、捜査に自信のない不安感等で、私は妙な興奮状態にあった。

私は、落ち着くように自分に言い聞かせ、固いピラーという車の部分にはぶつかっていないから助かるだろう。いや、とにかく命だけは助かってくれ。

と願いながら実況見分に従事していたが、搬送先の病院で被害に遭った少年の死亡が確認されたとの情報私の耳に入ってきた。

少年の死を知った瞬間、暑さとは違う汗が噴き出した。

事故現場での捜査を終え、少年が搬送された病院へ向かうと、少年の亡骸は霊安室のベッドの上に横

たわっていた。

絶叫しながら少年にすがり付く母親と、その母親に泣きながらすがり付く小学校低学年くらいの女児がいた。

私の上司は、少年に手を合わせ、母親に対して淡々と事故の状況、今後の捜査等について説明を始めた。私は、検視の説明をしようとしたが、母親に声を掛けることができず、しばらく出入口の前で立ちすくんでいた。

仕事柄、こうした場面に立ち会う機会があったが、悲しみに暮れる家族の姿を見ると目頭が熱くなる。

少年が亡くなった今、少年の母親と妹は普通の家族ではなく、遺族となった。

遺族が退室し、私の汗が乾く間もなく検視が始まった。

少年の亡骸を目の当たりにして、成人の遺体を目にしたときは異なる、言葉では表現し難い複雑な感情が湧き上がり、大きな外傷が見当たらず、いまだぬくもりが残る身体に触れながら

声を掛けたら少年が目を覚ますのではないかと非現実的なことを考えていた。

被害少年は、地元のサッカークラブに所属しており、サッカーの練習をするために自宅を出発し、信号機が設置された横断歩道を青信号で横断中に被害に遭ったことが判明した。

交通事故の原因は、車の運転手の脇見による前方

不注視であり、一方的な過失の交通事故であった。

交通事故発生からしばらく経ち、供述調書を作成するために少年の母親が警察署へ来署した。

しよすいしきった表情の母親に対して掛ける言葉が見付からず、簡単な挨拶をしてから相談室で聴取を開始した。

聴取開始から一時間半が経過し、母親の心労を考えて聴取を一時中断すると、立会いをしていた上司は席を立ったが、母親は椅子に座ったままの方が落ち着くと言って席を立とうとしなかった。私も母親と一緒に相談室に残ることにした。

静まりかえった相談室の中で、沈黙に耐えきれなくなった私は、既に手渡していた被害者支援の手引き等を再び手渡し、その場しのぎをしようとしたところ、母親が急に顔を上げ、私の目を見つめながら私のせいで翼（仮名）は死んでしまいました。

悪いのは私です。

と申し立て、私がサッカーの練習に行こうとしていた少年に話し掛けず、真っ直ぐグラウンドへ向かっていれば交通事故に遭うことも死ぬこともなかったと自分を責め始めた。

突然の母親の言葉に、私は声を発することができなかつた。

その後、少年が三度の飯よりサッカーが好きだったこと、妹思いであったこと、病死した少年の父親のことや家族旅行の思い出、交通事故の相手方を恨

んでいないことなどを話し続けた。

母親の話に相づちを打つのが精一杯で、黙ってそれを聞いていると次第に母親の表情が和らぎ

黙って私の話を聞いてくれてありがとう。

と私に言った。

母親は、少年が亡くなった事実を受け入れようと周囲の人に話し掛けたが、親戚や友人は身内の不幸が続いた母親を気遣って話題を変えたりするなど、自分の思いを聞いてくれる人がいなくて苦しんでいたことを明かした。

母親の胸の内を聞いてハッとした。

相手の立場に立って話を聞くという基本的な心構えが私には欠けており、捜査のために聴取することがあっても、相手の心の声まで聞くことがなく、「聞く」という行為で、心の痛みや苦しみを和らげられることを少年の母親に教えられたような気がした。

母親からの話を聞き終え、母親を玄関まで見送ると話を聞いてくれてありがとうございました。

少しずつでも前に進むうと思えます。

と話して、私に深々と頭を下げた。

これまで、自己紹介や被害者支援の手引きやパンフレットの交付、相談窓口の教示、定期的な電話連絡を繰り返すロボットのような支援しかしておらず、警察署を立ち去る母親の後ろ姿を見ながら、これまでの自分の対応やふがいなさに涙が込み上げてきた。

今回の交通事故は、私にとっては日々発生する事故事件の一つにすぎなかったが、被害者や遺族にとっては一生に一度有るか無いかの悲しい出来事であり、被害者と最初に接する警察官の役割が大きいことを強く感じた。

「きく」という文字には、事情聴取のための「聴く」、尋問のための「訊く」、捜査員が死者や物から「聞く」等、様々な意味がある。

話を聞いただけで全ての人が救われることはないが、少年の母親と接して学んだこと、感じたことを単なる反省点で終わらせることなく、相手の立場に立って「心の声」に耳を傾けることができる、聞き上手な警察官を目指していこうと思う。

重傷事故被害者の両親から教わったこと

警察署勤務 警部補 男性

市内の交通事故現場に臨場していたときでした。通信指令課からの、

「十トントラックと自転車の衝突人身事故発生。

自転車の女子高校生転倒、重傷の模様。直ちに現場急行せよ。」

との無線指令を傍受しました。

サイレンを鳴らし現場へ急行しました。

現場に到着すると、車体下部に自転車が挟まった状態で大型トラックが止まっています。

私が現場に到着したとき、女子高校生は既に救急車で搬送されていました。

先に現場に到着していた警察官から、「女子高校生は足に大ケガをしている。女子高校生が自転車ごとトラックに轢過された。」

と聞きました。

トラックの運転手を現行犯逮捕し、捜査を開始することとなりました。

女子高校生のケガは

開放骨盤骨折、左足骨折、右足下肢切断を施行という重傷でした。

事故状況は、女子高校生が自転車を運転し、青色信号で横断歩道上を横断中、左折してきた大型ト

ラックに、未発見のまま衝突され、そのまま轢過されたものでした。

これまでも、家族を亡くすこととなった事故や、大ケガを負うこととなった事故に関わってきました。

そのたびに、被害者や被害者の家族から被疑者に対する怒りの言葉を聞きました。

それとともに、何度となく「ちゃんと捜査してくれてんのか。」などの、警察の捜査に対する不満、「警察に私たちの気持ちがかかるのか。」などの警察の対応についての不満などを言われてきました。

これまで被害者への対応で、思い通りにいったことなど、一度もありませんでした。

そんなこともあり、私は、

「被害者、被害者の家族は、被疑者に厳罰を与えることを望んでいる。だったら、被疑者に厳罰を与えさえすれば、それで被害者は納得してくれるはず。そうすれば、警察が、非難されることはないだろう。」

と、勝手に思い込んでいたのです。

この事故のときも、そう思っていました。

被疑者を逮捕し、目撃者を探し、綿密な見分等の捜査をしました。

被害者家族への連絡は、被疑者を逮捕したことや捜査経過の説明等、ありきたりのことをしただけです。

それは、被害者やその家族から、被疑者に対する怒りや、警察に対する不満を聞いたたりするのが怖

かったからかも知れません。

そして、警察署に被害者の両親に来てもらい、事情聴取をすることになりました。

事情聴取に当たり、両親に、

「今回の事故について思うこと、相手に対する感情、相手をどう処罰してほしいかを言ってください。それを調書にさせてもらいます。」

などと告げました。

当然、両親が嚴重処罰を望むものと思っていたことから、

「この事故の被疑者のせいで、娘さんの足は元には戻らない。そのやり場のない怒りを私にぶつけてくれれば、それでいい。」

と思っていました。

だけど、この二人は違いました。

父親、母親は、

「被疑者への処罰を重くしてもらったところで、事故がなかったことにはなりません。被疑者には、もう二度と、こんな事故を起こさないようにしてほしいです。」

と言ったのです。

「えっ？」当然、嚴重処罰を望むものと思っていたのに。

そして、次に言った言葉は、

「A子には、せっかく助かった命なのだから、あのとき、死んだ方が良かったと思うようなこと

がない、

『あのとき死んでなくて良かった。』

と思えるような人生を送ってほしいです。私たち家族がA子を支えていきたいと思えます。」

「何で。何で。被疑者に対する怒りは？警察に言いたいことはないの？」と私は頭の中が混乱しました。被疑者に対する、

「もう二度と、こんな事故を起こさないようにしてほしいです。」

との言葉。

娘のことを思う両親の前向きな言葉。

つらかったはずなのに。

悲しかったはずなのに。

苦しかったはずなのに。

腹も立っただはずなのに。

なのに、被疑者に対する怒りの言葉も、警察に対する不満の言葉もない。両親の言葉を、パソコンのキーボードをたたき打ち込もうとしましたが、キーボードをたたき手が止まってしまいました。

手を止めて、目をつぶり、必死にこらえたのです。駄目でした。

私は、「ウツ」と言う声が漏れ出し、続いて涙が出てしまいました。

恥ずかしかったです。

私は、二人に、「ごめんなさい。」と言って、一旦、執務室から外に出てもらいました。

どう思われたのだろう、警察官が、こんな姿を見せて。

前向きに、頑張ろうとしている二人に、こんな姿を見せてしまった。

悲しんでいるだけの言葉じゃなくて、前向きになろうとしている言葉だったのに。

ただ、自転車であつていただけの女子高校生が、大ケガを負った事故。

「家族は悲しんでいる。被疑者に嚴重処罰を受けさせてやる。」それが、警察のあるべき姿であると思つてしまつていました。

「家族も、それを望んでいるはず。望んでいるに違いない。」そう勝手に思い込んでいました。

しかし、悲しみを乗り越えようと、前向きに生きようと、頑張っている人が、目の前にいたのです。

これまでの私は、被害者やその家族の思いから逃げるように、淡々と捜査の過程等を伝えていただけであることに気付いてしまつたのです。

被害者やその家族ともつと関わつていけば、その方々の気持ちがあつたはず。

もつと話をしていれば、悲しみを乗り越えようと頑張つている被害者やその家族のことがあつた、少しでも支えになれたはず。

更に応援する言葉を伝えたりできたはず。

「被疑者を捕まえて、処罰を受けさせれば、それでいい。警察ができることは、それくらいしか

ない。それ以上、警察に何ができるんだ。これ
でいい。」

と思つてしまつていた自分が情けなくて、恥ずかしくなつてきました。

「悲しみを乗り越えて、前向きになることができる。」
そう思つている被害者等のために、私にできることがあつたはず。

この件では、私は被害者やその家族に対して、支援らしい支援は何もできませんでした。

被害者やその家族だけが、つらい思いをしながらも、必死に頑張つて、乗り越えようとしたのです。

警察官である私は、何もできませんでした。
悲しみを乗り越えようとする被害者やその家族に

何らかの支援をすることができたのではないか。
被害者や家族の思いがあつたら……。

ありきたりの言葉だけど、その人の気持ちになつて、親身になつて、被害者支援を行つていきたい。

私は、今回の経験で、被害者から、被害者支援の意味、そして、被害者支援の大切さを改めて教わりました。

悔しかった思い

警察署勤務 巡査長 女性

私は、被害に遭った女の子の力になれたのだろうか。
この話は、夏が終わりを告げようとしていた頃の出来事です。

当時の私は、生活安全刑事課で勤務していました。刑事当直に就いていたある夜十時頃、「高校生の女の子が帰宅途中、自宅付近の市道で男に突き飛ばされて転倒した。」との通報があり、先輩刑事と二人で現場に向かいました。

事案の詳細が判然としない中、私は、現場へ向かう捜査車両の助手席で、「こんな夜遅くに女の子を突き飛ばす男の目的は何なのだろう？わいせつ目的の可能性もあるから、まずは被害者の女の子から話を聞いて、突き飛ばされたときに触れたであろう衣類等の鑑識をしないとイケないかな。」などと捜査の段取りのことを考えていました。

発生現場は、街灯の設置もほとんど無く、周辺は真っ暗闇、人通りもない山間部にある集落の中の狭路で、私たちが到着すると既に制服の男性警察官が被害者と思われる女の子から事情聴取を始めていたところでした。車中から、その女の子の表情をうかがうと、特に怯えたり、取り乱したり、泣いたりすることもなく、落ち着いた態度で受け答えしている

様子が確認できませんでした。私は、その様子から、「何らかの事情はあったものの、単に突き飛ばされて転倒しただけなのかな。」と思ってしまうのです。

そして、被害者の女の子を捜査車両の後部に座らせ、「何があつたのか詳しく話して。」と質問する私に対し、彼女は、「男の人に突き飛ばされて転倒しただけ。」という答えしか返ってきませんでした。しかし、私は幾度となく、「相手はどんな人だった？知らない男？どっちに逃げた？」などと被害時の状況を詳しく聞いていくと、彼女はやがて下を向き、「やっぱり突き飛ばされたんじゃないかと……道で男に押し倒されて、触られました。」と、少しづつ言いづらそうに、わいせつな行為をされたことを話し始めてくれたのです。

このとき、私と男性の先輩刑事の二人で話を聞いていたのですが、彼女がすぐに真相を話すことができなかつた理由を直感した私は、先輩に車から出てもらい、二人きりで話を聞くことにしたのです。

彼女は、それまでと同じように落ち着いた様子で、「男の人の前では言いづらかつたので……。」と言い、話し出せなかつた理由を告げた後、男に押し倒され、わいせつな行為をされた状況について詳しく話してくれました。彼女は顔を下に向けたまま、淡々と話をしてくれました。その様子は、話をするこゝろでよみがえってくる当時の恐怖感と必死に戦いながら気丈に話をしていることがうかがえました。

彼女から被害状況を一通り聞き終えた後、現場での確認作業や鑑識作業、更に供述調書の作成などの捜査協力をお願いしました。すると、彼女は急に不安な表情となり、「話をするだけじゃないんですか？」と問い掛けてきたのです。私は、犯人を捕まえるためにはあなたの協力が必要ですと伝えて、彼女の考えがまとまるのを待ちました。

沈黙が数分間続いた後、彼女は「名前とか他の人に知られるんですか？」と、更に不安そうな表情で尋ねてきました。私が名前等は知られることはないと言えると、やがてゆっくりと顔を上げ、「分かりました。協力します。」と力強く言ってくれたのです。

捜査車両から降り、彼女の案内で証拠の採取等をしていると、彼女は突然、「言いくいんです、もしかしたら犯人は知っている人かもしれません。」と話し出したのです。続けて、「名前は知らないんですが、多分、近所の人です。」と教えてくれました。彼女の供述を聞いた私は、「被疑者検挙に大きく近づいた。」と思う一方で、被疑者が近隣住民であるなら、彼女自身の驚きや悲しさは、当初、私が想像していた以上のものということになり、より慎重な対応が求められると思いました。

その後、被害者支援という側面から何度か話を聞く中で、彼女は、「被害に遭って怖い思いもしたけど、悔しい思いの方が強いんです。私はテレビとかで、こんな犯罪のニュースを見ていて、私だったら力で

も負けないし、逃げられると思っていました。でも、実際に襲われたときには、怖くて何も抵抗できなかった。それが悔しくて悔しくて泣けてきました。」と話しました。当事者ではない人は、「殴ってでも、蹴ってでも、逃げるのができたのではないか。」などと心無い言葉を発する人もいますが、それができないために被害に遭っていることを改めて思い知らされました。

彼女の協力により、証拠を採取することができて、その鑑定結果を心待ちにしていたが、採取資料は、彼女が話した人物とは合致せず、また、その他の人物にも結びつかず、事件の早期解決には至りませんでした。

その頃、彼女は被害に遭った次の日から自分の家に帰る道が怖くて家に帰ることができず、祖母の家で生活していると聞いていました。後日、彼女は、「帰る道に差しかかると男がまた襲ってくるのではないかと不安になって、家に帰るだけなのに身体に緊張が走り、足がすくんでしまいます。」と話してくれました。

「被疑者を検挙できれば、彼女の気持ちも少しでも楽になるかもしれない。安心して家に帰らせてあげることができるだろう。」と想っていた私は、鑑定結果に肩を落とすと同時に、また不安な日々を送らせてしまうのかと落ち込みました。

私は申し訳ない気持ちで、彼女に犯人の検挙に

至っていないこと、採取した証拠が教えてくれた人のもものではなかったことを伝えました。

私の言葉を聞いた彼女は気落ちした様子で、「そうですね。」とだけ言いました。私は、彼女の様子を目の当たりにして泣き出しそうになるのを堪え、「色々協力してくれたのにごめんね。でも、協力してくれて取ることができた資料はずっと残って、今後の捜査にもつなげていくから。この先、他の事件で犯人が捕まったときに、この事件の犯人も判明するから。」と説明しました。

すると、彼女は「いっぱい助けてくれてありがとうございます。私に嬉しかったです。」と笑顔で返してくれたのです。私は、「彼女の助けになることが何もできていないのではないか。」と不安だらけでしたが、彼女の言葉で私の気持ちが救われたのでした。

今春から、私は、被害者支援係として新たなスタートを切りました。子供や女性が被害者となる事件事故が数多く発生する中、女性警察官としての役割、重要性もますます高まっています。

今後、様々な形で犯罪被害者と接する機会があると思いますが、被害に遭った方が安心して話をしてくれるように、そして、「この人に話してよかった。」と言ってもらえるように日々、勉強と経験を積み重ねていきたいと思っています。

いつか必ず、「犯人を逮捕した」と彼女に伝えら

れる日が来ることを信じて。